

ご挨拶

スロベニアのリュブリャナ大学文学部を会場にして第38回日本語教育連絡会議を無事に開催することができことを大変光栄に思っています。今回の連絡会議は2025年8月21日（木）から23日（金）にかけて行われました。参加者は、日頃の実践、研究、調査について35本の発表を聞きながら、一日中熱のこもった議論を重ねました。連絡会議でいつも興味深く思うのは、扱われるテーマが実に多様であるのに、聴衆が席を離れることなく議論に耳を傾け意見を交わしていることです。これは、日本語教育が取り扱う領域の広さを窺わせるとともに、連絡会議という民主的な場の体現であると言えるでしょう。

個人的な思い出になりますが、私がリュブリャナ大学に赴任してまだ右も左も分からなかった頃、アンドレイ・ベケシュ リュブリャナ大学名誉教授から「さあ、連絡会議をするぞ、準備をしよう」と言われたのが会議運営に関わった最初の経験でした。この時は、諸先輩に助けられながら会議の準備・運営に五里霧中で走り回ったことを覚えています。それから月日が経ち、世紀も改まり、ベケシュ先生も退職なさいました。そこで、ベケシュ先生が参加できるうちに、連絡会議をもう一度スロベニアで開催できないかと考えるようになりました。そして、ベケシュ先生から受け継いだ教えとスロベニアという環境を生かして、今ここでしか実現できないような会議のあり方を模索しつつ、大学の同僚や学外の関係者と相談を重ねました。その試みが、会議初日に行ったポホリエ地方へのフィールドトリップです。また、休憩時間の心のこもったコーヒーも試みの一つです。

我々が日々実践している言語教育は、毎日の生活や社会・文化と切り離して存在することはできません。1日目に行ったズレチェ市とレスニク村へのフィールドトリップでは、スロベニアの一地方の人々がどのように自らの歴史・言語・風習をいかに大切に守り継ぎ、老若を問わず地域の人々が共に日々の生活を営んでいるかを体験的に垣間見ることが意図しました。そして、このフィールドトリップを1日目に行うことによって、連絡会議に参加する参加者がより多角的な言語感と文化理解・継承への意識をもって発表や議論に臨んでいただけることを願いました。

第38回日本語教育連絡会議の実施に当たっては、リュブリャナ大学文学部、同文学部アジア研究学科、スロベニア日本語教育協会より多大なるご協力を承りました。また運営スタッフとして参加者に心地よい議論の場を提供してくれたニーナ・ゴロブ先生、クリスティナ・フメリヤク寒川先生、カティア・プレダリチさん、アナ・ラジンゲルさん、そしてアニャ・ベベルさんに心から感謝を申し上げます。また現地実行委員を遠くから支えてくださった若井誠二さんその他、日本語教育連絡会議お世話会のみなさまにもお礼を申し上げます。ポホリエ地方のような豊かな言語生活が、世界各地で今後も永く維持・継承され、我々も言語教育という側面からそこにに関わり続けていけることを心から願っています。

リュブリャナ大学
守時なぎさ